

## 芸術部会

### 研究主題 「生徒一人一人の表現する力を伸ばす授業の工夫・改善」

#### I 主題設定の理由

芸術部会では、ここ数年、芸術科における評価法とその改善について研究し、いかに生徒一人一人の意欲を高め、表現活動に向かわせるか、また、個々の生徒の表現力の結実である作品や、演奏の過程を重視して、多様な視点から評価していくかという評価方法の工夫改善について研究開発を行った。

芸術科における評価の4観点について研究した結果、「関心・意欲・態度」を高めることは、指導法の工夫として、導入の際などは必須の要件であるが、何と云っても表現力に直接かわる「芸術的な感受や表現の工夫」、「創造的な表現の技能」の2観点が授業の中核をなす部分であり、ここに授業改善のポイントがあると考えた。なぜならば、表現技術が伸長しなければ、作品や演奏の評価が低くなり、生徒にとっても、また、教師自身にとっても達成感や充実感を味わうことが難しくなり、授業の質は低下し、芸術科の目標が実現されないからである。

A. H. マズロー（1908～1970）は人間の欲求を心的エネルギーと捉え、それを人間的成長と関係付け、論じている。それによると、ごく幼い時は、生理的欲求のみで動いているが、もう少し成長すると、安全、所属、愛という欲求が優位になる。さらに、成長とともに承認の欲求へと進む。そして、発達の最終段階となると、自己実現の欲求が他に優先するとある。この自己実現の欲求の対象は、社会的に価値あるものへと向けられて行き、この社会的価値あるものの一つとして、芸術があると考えられる。

芸術は音や色彩のような様々な要素を組み合わせ、個々の心の中の理想との調和的表現を目指す活動である。また、快い音や美しい色彩を、技術と形式をもって表現することは、個々の内的欲求を知識、技能、経験をもって追求し、理想を目指すことである。それが達成できた時には、自己実現を果たしたという強い実感を伴うものではないだろうか。心身の成長の著しい高校生段階においては、芸術科の授業において、表現する力を伸ばすことが、生徒の一人一人の自己実現を支援することにつながる大変重要なことであると考えられる。

本部会では、生徒一人一人の生徒の表現する力の伸長を重要課題と捉え、研究主題を設定した。そこで、音楽、美術、工芸、書道のそれぞれの科目の特色を生かし、音楽では「豊かな響きで歌いアンサンブルする力」美術では「確かな構成力」「豊かな色彩感覚」工芸では、「発想し、構想する力」書道では、「運筆する力と紙面構成力」を生徒に身に付けさせる表現力と考え、以下の事例を基に研究を進めた。

#### II 芸術科における授業改善

授業改善には、授業の目標、教材、学習過程、生徒の学習活動、指導技術、評価の6つの要素が密接にかかわりあっている。この6つの要素に沿って、芸術科の特性と本年度の芸術部会の主題である生徒の個の表現力の伸長との関連について述べる。

## 1 目標

授業で何を身に付けさせるか、何をできるようにさせるか、またこの芸術の授業がいかに大切であり、生徒の芸術的な感性を伸ばし、その結果、生涯にわたって豊かな生活を送ることができるようになるかについて、教師は熱くその魅力を生徒たちに語らねばならない。ここで教師は、音楽、美術、工芸、書道のそれぞれの特性を示し、教師自身がこれまでの人生で芸術に魅了されてきた経緯を生徒に開示するなどして、生徒のモラールアップを図ることが大切である。

## 2 教材

教材は、それを表現すること自体が魅力的でなければならない。まず「すごい」「面白い」といった感動や「いったいなんだろう」とか「意外で驚いた」という生徒の感性、感覚に訴える素材探しから始めたい。本事例では、ア・カペラ（無伴奏）の声楽アンサンブルであったり、大胆な筆使いであったり、いつまでも触れていたいと感じる素朴な木の質感や色の構成を教材として取り上げている。

## 3 学習過程

学習過程は、授業のプランであり、授業のそのものである。ここで教師に求められるものは想像力と柔軟性である。ここでは、教師が生徒の作業の進捗状況のみならず、いかに生徒の思考、発想にいたるまで十分に想像できるかにかかっている。また、授業が計画のとおり進まない場合、速やかに流れを変更しながらも、いかに目標に近づいてけるかという柔軟性が求められる。

## 4 学習活動

これは学習形態であり、個別の作業だけでなく、共同作業を取り入れるなど形態を工夫することである。本研究は生徒一人一人の表現力を、個性発揮や自己実現力と捉え、単なる受身の学習ではなく、生徒自らが積極的に取り組める活動を工夫しなければならないと考えている。

## 5 指導技術

教師が授業を行う上での技術的な要素を意味している。指導というと教え込むことに重点を置きがちであるが、生徒の感性を開発していく発想が大事である。つまり、教師の思惑を超えて生徒が表現することも十分予想して、柔軟な発想で指導するべきである。ここで大事なのはいかに生徒を褒めるかである。教師が褒め、感動をすることで生徒の意欲は高まり、表現力は確実に身に付くものと考えている。

## 6 評価

芸術部会では、評価について、ここ数年、力を入れて研究してきた。評価は、いかに生徒の授業の過程にかかわる情報を多く収集し、かつ多くの視点から生徒の良いところを評価していくかに尽きる。ここで大切なのは、結果としての作品の優劣に終始することなく、生徒の感性が伸びたか、つまり外から見えにくいところをいかに評価するために努力するかである。また、評価は教師の指導に対する評価であるとともに、次の目標を決定する大事なものである。高校生の段階であれば、作品のどこをどう評価してもらいたいかに生徒に考えさせ、教師と意見交換するなど、状況に応じた評価方法のさまざまな工夫が考えられる。

### Ⅲ 各科目における実践研究事例

#### ( 音 楽 )

#### 題材名 「ア・カペラによるヴォーカルアンサンブル」(音楽Ⅰ)

##### 1 題材設定の理由

大人数によるピアノ伴奏付き合唱には、ダイナミックな表現が可能なことや、少々歌唱力不足でもみんなで一緒に歌うことにより演奏が成り立つという利点がある。しかし、ピアノにピッチを支えてもらって、パートごとのユニゾンをやりに歌い、「なんとなくハモる」もしくは「あまりハモりを意識しない」コーラスになってしまう危険性が少なくない。大勢で同じパートを歌うことにより、一人一人の存在が不明瞭になりやすく、個々の評価もしづらい。

一方、一人 1 パートによるヴォーカルアンサンブルは、「お互いに聴く力」や「正確な音程で歌う力」を高いレベルで要求される。さらに、ア・カペラで演奏することは、「正確なピッチを保ち豊かなハーモニーをつくる」ために、より高いイメージ力と集中力が必要である。ヴォーカルアンサンブルは、生徒にとって、合唱よりも難易度が高い課題となるのだが、仲間とともに豊かなハーモニーを作ることができたときの達成感や、音楽的な満足感を得ることが、大きな感動体験となるのである。

ヴォーカルアンサンブルの取組は、それらの力を育成することが期待でき、生徒個々の評価もつけやすいという点において、音楽科の学習活動として大変優れていると考える。

##### 2 題材の目標

- (1) アンサンブルの一員としての自覚を持ち、責任と誇りを持って自分のパートを演奏する。
- (2) 正確な音程感とハーモニー感を身に付け、豊かな演奏を行う。
- (3) 自他の演奏を客観的に評価できるように聴く力を伸ばし、演奏改善を行えるようにする。
- (4) 小人数によるヴォーカルアンサンブルを通して、生徒一人一人の音楽的な技術や能力を伸ばし、音楽を演奏する喜びを味わう。

○課題曲 「おぼろ月夜」(作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一 編曲：横山潤子)

「Mousa I」P. 58 (教育芸術社)

「Sing Along」(作詞・作曲：ロバート・アレン)

「Mousa I」P. 28 (教育芸術社)

##### 3 題材の評価基準

- (1) ヴォーカルアンサンブルによる演奏に関心を持ち、一人が 1 パートを担当するという責任感を持ち、意欲的に取り組む。(関心・意欲・態度)
- (2) 豊かなハーモニーのイメージを感じ、アンサンブルによる音楽の楽しさを表現する。(芸術的な感受や表現の工夫)
- (3) 自分自身で練習方法を工夫し、歌唱技術を伸ばす。(創造的な表現の技能)
- (4) 自他の演奏を客観的に聴き取り、正しく評価し、演奏改善に役立てる。(鑑賞の能力)

#### 4 学習活動と具体的評価基準

学習活動	関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
いろいろなア・カペラを聴いてみよう。(プロのCD等を複数鑑賞する)	多様な演奏の形に興味を持つ。			演奏者の特徴や違いを聴き取る。
4人のグループを作ろう。(SATB各パート1名ずつグループを作る)	自ら積極的にグループを作成する。			
基本的な発声・音感のトレーニング。(カデンツを4人で歌い合わせる)	より良い発声を心がける。	豊かなハーモニーを感じ取る。	和音の変化を表現する。	4人で作るサウンドをよく聴けたか。
すべてのパートを全員で音取りをする。(コードを伴って～MIDI活用)	他のパートにも関心を持つ。	和音の中の1音を感じ取る。	全体の構成を理解しながら演奏する。	サウンドの変化を聴きとる。
全パートで合わせよう。(合唱の形→ダブルカルテット→1グループ)	積極的に演奏に参加する。	4人で作る音を感じて歌う。	より良いサウンドを求める	お互いの演奏を聴きあう。
録音してみよう。(プレイバックを聴き、演奏改善にフィードバックさせる)	自分たちの演奏を十分に聴く。	意図したとおりに演奏する。	演奏にフィードバックする。	客観的に聴き、評価する。
発表をしよう。(グループ・コンサートをを行い、ステージで演奏する)	他人の演奏にも興味を持つ。	演奏に集中する。	自分たちのイメージ通りに演奏できたか。	自他の演奏について、評価カードの記入により、評価する。

#### 5 結果と考察

ア・カペラによるヴォーカルアンサンブルは、生徒にとっては大変難しい課題のようだ。正確な音程感を身に付けるために、「コールユーブンゲン」を教材とした練習を取り入れ曲の構成やハーモニー等の理解のために楽典(音程・和音・コードネーム等)の学習も平行して行った。授業以外の時間でも個人練習ができるように、MIDIデータをインターネットのホームページ上に用意し、生徒が自由に利用できるようにした。その結果、課題曲を



図1 グループごとの練習風景

クラス全員で歌った時は、とてもしっかりした声とハーモニーで歌うことができ、合唱の力が大きく伸びたことが認められた。しかし、グループ単位で歌うと、自分のパートを十分に演奏できない生徒が少なくない。やはり合唱とは違う難しさが存在すると考えられる。ア・カペラによるヴォーカルアンサンブルを成功させるには、さらに生徒一人一人の力をもっと高いレベルまで引き上げるための方策を講じる必要がある。

#### 6 まとめ

ア・カペラによるヴォーカルアンサンブルは、ア・カペラの楽譜があまり無いことや、練習場所の確保等の問題等がある。しかし、取り組んでみて感じたことは、課題は数多くあるものの、音楽教育の題材として大変意義があるということである。

今後はポリフォニー音楽や、マドリガル、ジャズコーラスへとつなげていきたい。そして、生徒一人一人に、生涯にわたって音楽を、そしてア・カペラを愛好する心情をはぐくみたい。

( 美術 )

題材名「ぬりえ」(美術Ⅰ)

1 題材設定の理由

ほとんどすべての人が子ども時代に「ぬりえ」に接し、色を塗って遊ぶという経験をしてきている。子どもにとって色を塗ることは遊びであり楽しいことであるはずなのだが、成長するにつれて人の目を気にしたり、上手く描かなければならないと考えるようになっていたりして、絵を描くことに苦手意識を持つようになる生徒も少なからずいる。そこで、色を塗る作業だけを取り出すことで作品を完成させやすくし、絵を描くことへの苦手意識を払拭することを目的として題材として取り上げた。

2 題材の目標

自分なりの色の使い方を工夫し、組み合わせによって色の見え方や印象が変化することを理解する。また、他の作品と比較することで自分の特性を知るとともに、他人の作品のよさや美しさを感じ取る。

3 題材の評価基準

- (1) 色を塗ることに興味をもち、意欲的に制作をする。(関心・意欲・態度)
- (2) 色が相対的に存在していることを理解し、意図的に表現する。(芸術的な感受や表現の工夫)
- (3) 自分の意図に応じた混色法や表現の方法を工夫する。(創造的な表現の技能)
- (4) 友人の作品の特性や工夫を感じ取り、そのよさや美しさを味わう。(鑑賞の能力)

4 学習活動と具体的評価基準(6時間)

学習活動	関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
パネルに画用紙を水張りし、用意したパターンを複写する。(1時間)	水張りの方法を理解する。			
自分の一番好きな色を数カ所に配置する。次に、その配置した色が美しく見えるような色を考えて隣に配置するというように順に彩色し完成させる。(4時間)	隣にくる色が変わることで、もとの色の見え方や全体の印象が変化することを理解し、意欲的に様々な組み合わせを試してみる。	最初に塗った色が美しくみえるようにするには、どんな色を隣に配置すればいいかを考えながら彩色する。 部分が全体にどう影響するかを考えながら彩色する。	自分のイメージした色に近づけるように混色を工夫し、効果的な表現を目指す。	同じ色でも、隣にくる色が変わることによって印象が変化することに気付く。
完成作品を並べて、お互いの作品について講評する。(1時間)	友人の作品のよいところを積極的に探し、的確な言葉で伝える。			他の作品のよさや美しさを感じ取る。

## 5 結果と考察

今回は、教科書に掲載されていたフローレンス＝ヘンリの『非具象的な構成』を使用して、最初のパターンとした。(図1)全員が同じものからスタートできれば、もとになるパターンは何でもよかったのだが、純粹に色を塗るということをしたかったので、形から色が連想されるような具象絵画は避けた。

画用紙などにコピーしたものに彩色すれば早いですが、これだと生徒が受身になり過ぎるため、パネルに画用紙を水張りしたものを使用し、そこに用意したパターンを複写するという方法を行った。水張りは、きれいにできれば「さあ描くぞ」という意欲を起こさせてくれるものである。水張りした画用紙にアクリル絵の具で描くというようにしたのは、何度でも描き直しができるという意味もあったが、一度塗った箇所をやり直す生徒はほとんど見られなかった。

最初に自分が一番好きな色を数カ所配置し、次にその色がより美しく見えるようにするには、隣にどんな色を配置すればいいかを考えて描くというように、最初の塗り方は指定し、部分から塗り広げていくというようにした。これは色がその色単独で見えるのではなく、相対的に見え方や印象が変わってくるということを体験させたかったからである。

完成した作品を並べ、それぞれについてよいところと気になったところとを紙に書いて作者に渡し、お互いの寸評を交換した。少人数だったため、全員が全作品についてコメントすることができたが、人数が多いクラスの場合はグループ分けなどすればよいであろう。

全員の作品を並べて鑑賞することで、それぞれに個性や特性があらわれていることがはっきりとわかった。同じパターンを使うことでより如実にそれがあらわれるはずという、当初の目的は達成できた。中でも「やはり自分の性格が出ると思った」という感想を引き出したことは収穫であった。普段、作品を完成させるまでに時間がかかるためなかなか講評会を持つことはできなかったが、お互いの作品を観ることは有益であることが改めてわかった。

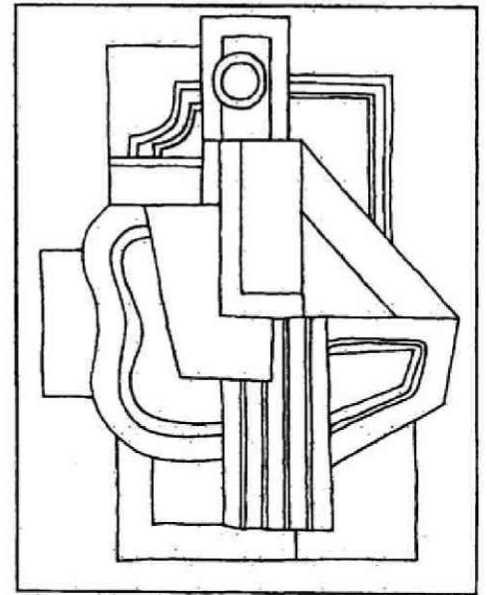


図1

## 6 まとめ

今回は「ぬりえ」という言葉を使ってみたが、やっていることは平面構成や色彩構成と基本的に同じである。普通は自分で画面を分割するという作業が入る訳だが、そのところは省き、こちらで用意したパターンを使うようにして色塗りをする作業だけに絞った点が工夫したところである。

「ぬりえ」に関しては批判的な文献があるそうである。「ぬりえ」は「低俗」で「安易」であり、「枠を与える」ことは「子どもの創造性」を促すことにはならず、美術教育としての効果は期待できないということである。この指摘はもっともであると感じる部分も多い。しかし、あえて今回「ぬりえ」としたのは、条件を同じにしたほうが、より個人の特性が見えやすくなり、個々の表現力を伸ばすことにつながると思ったからである。当たり前のようなことだが、同じ条件の下で描き始めても、できあがりの作品はひとつとして同じものにはならない。それを体験し鑑賞することで、個々の特性を知り、独自の表現を模索することにもつながるはずである。

( 美術 )

題材名 「写真集をつくる」 (映像メディア表現)

1 題材設定の理由

今回の学習指導要領の改訂で「美術Ⅰ」の内容に新たに加えられた領域である「映像メディア表現」は、従前の美術の内容と比べると、制作の過程、認識の様相、表現の方法に特徴があり、表現媒体としてさまざまな可能性を持っている。また、生徒たちの生活のなかにもカメラ付携帯電話のように日常持ち歩く道具としてカメラが普及している。そこで、より身近になったカメラを使って、自己の主題に沿った映像を記録するとともに編集、構成、プレゼンテーションなどの制作過程を通して写真集としてまとめ、創造的な表現の追及をすることが感性と美意識を磨き、個性豊かな美術の能力を高めると考え題材として取り上げた。

2 指導目標

- (1) 映像メディア (写真) の特質を生かした自己の感性を表現できる主題を見つける。
- (2) 光や色、写真機器・材料の基本的な理論や使い方を知り、自分の意図に応じた創造的な表現を追及する。
- (3) 映像メディア表現の特質を理解し撮影・編集・構成・提示を行うとともに、自分の視点で鑑賞し映像を読み解く能力や表現力を養う。

3 題材の評価規準

- (1) 写真の表現に興味を持ち、主題をもとに主体的に創造性豊かに表現活動を行う。(興味・関心・態度)
- (2) 自己の主題に沿って撮影や編集の表現技法を工夫するとともに豊かな感性と柔軟な発想で写真をより効果的に構成できたか。(芸術的な感受や表現の工夫)
- (3) 写真の基本的原理を理解し、切り取った映像の効果的な表現を工夫する。(創造的な表現の技能)
- (4) 自己と他者の作品の主題を「言葉」で表現できるか。(鑑賞の能力)

4 学習活動の具体的評価規準

学習活動	関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
映像による表現を知る。	・写真が社会生活の中でどのように扱われているか考える。 ・フォトジャーナリズムとメディア社会についてインターネットなどを活用し調べてみる。	・作家と作品 (写真) について自己の考えを言葉にできる。 ・他者の作品から工夫やよさを見つけるとともに自分の意見を言葉で表現できる。	・写真の画面構成や画角などの表現について分析することができる。	・絵画と写真の差異とは何かを考察することができる。
写真の理論と機材の構造を知る。(ピンホールカメラの制作)	・精確に部品を加工しよりよいものを造ろうと根気強く制作を行うことができる。		・よい映像を定着するために露出や現像について理解する。	・レンズを使わないピンホールカメラの表現力や映像の魅力を理解する。
主題を考える。	・自己の目標を明確にして主体的に主題の設定ができる。	・自己の主題に沿って構成や編集の段階までを想定して構想を深めることができたか。	・写真の基本的原理を理解し、切り取った映像の効果的な表現を工夫することができる。	
撮影技術の学習	・自分の主題を大切に創造性豊かに表現する。 ・光やレンズの画角に留意し自己の表現をしようと努力する。		・光、露出、レンズ特性、構図などに留意し主題や表現意図を的確に表現できたか。	

撮影と編集	・撮影から画面の編集作業まで、計画的に美しく制作を行うことができる。	・自己の主題に沿って撮影や編集の表現技法を工夫したか。	・撮影技術を理解し表現の多様な表現を試み編集作業と連携して作品の制作ができたか。	
写真集の構成	・自己の制作意図や撮影された映像のイメージを主題に従って効果的に構成する。 ・構成の途中段階を他者に提示し意見を聞き構成の参考とする。	・主題に沿って撮影や編集が終わった写真をより効果的な構成ができたか。	・写真集は写真の集合であるが効果的な構成により自己の意図する文脈が表現できたか。	・自己の写真群を他者と相互に再構成して、他者の作品の良さや思考を読み取ることができたか。
プレゼンテーション	・完成した作品の鑑賞や自己評価に主体的に取り組んでいる。	・作品を提示し自己と他者の意見の違いや見方の差異を考察する。	・写真の特性を理解し様々な表現に挑戦し完成することができたか。	・完成した作品を他者と相互に鑑賞し優れたところや「読み方」の差異を考察できたか。 ・自己と他者の作品の主題を「言葉」で表現できるか。

## 5 結果と考察

この授業展開の中で生徒により明確に理解させたかったのは、絵画における表現と写真の表現との差異である。絵画と写真の差異を基本的な表現の観点からいうと、絵画は手によって直接痕跡を残す表現であるが、写真はカメラという装置を使って物理的に痕跡を記録し印画紙などに再現することによって表現するという過程の違いにあるといえる。生徒の作品は一つ一つ個性的で主題を的確に反映させている。また、お互いの作品のよい点や異なる意見を活発に言葉にして論議していた。このことからこの題材により映像を読み解く能力や表現力を伸ばしているように感じた。

## 6 まとめ

写真には、撮るときには気付かなかったもの、しかしながら他人には気付いていたかもしれないものが写り込んでいて、それを見るものがまったく違う観点から見るという「多義性」（図参照）の存在がある。それは、一つの写真あるいは写真集の中の写真群が見る人によって様々な意味に捉えるということである。個々の写真はあくまで「表現されていないイメージ」であるが、それを構成することによって文脈が形成され、そのことが自己の表現を追求することになる。この題材では、写真の構成による自己の文脈づくりが「確かな構成力」を育て、生徒一人一人の表現力の伸長につながることで写真の編集・構成作業の中で確認できた。今後は、指導方法の更なる改善を図り生徒による授業評価や外部評価を参考に授業の充実を図っていきたい。

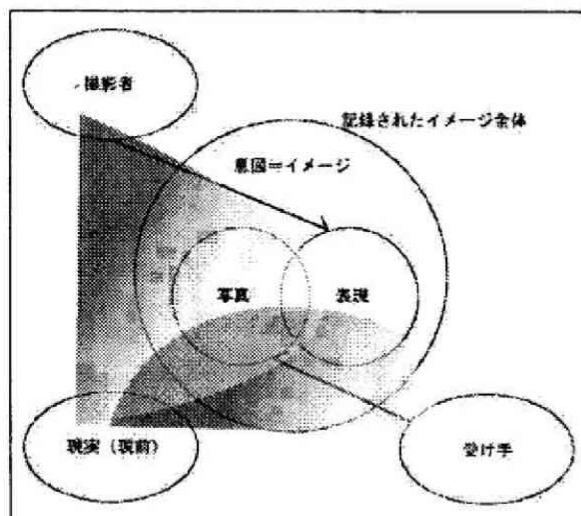


図1 絵画と写真の差異、写真の多義性を示した図



( 工 芸 )

題 材 名 「使いやすいバターナイフをつくろう」(工芸Ⅰ)

1 題材設定の理由

この題材では、一人一人の身体に合い、かつ、その道具本来の機能美を追求できるものを制作する。バターナイフを選んだ理由は、自分で使う時の「持ちやすさ」や「塗りやすさ」を意識しながら制作できることや、木材のよさを生かし、造形の美しさを追求できるためである。実用性と造形美を追求することと、自分にとって使いやすい道具をつくることを両立させることで、生徒一人一人の表現力をはぐくむことをねらいとする。

2 題材の目標

バターナイフという身近にあるものの制作を通して、生活を心豊かにするために工夫する態度を育てるとともに、感性を高め、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばす。

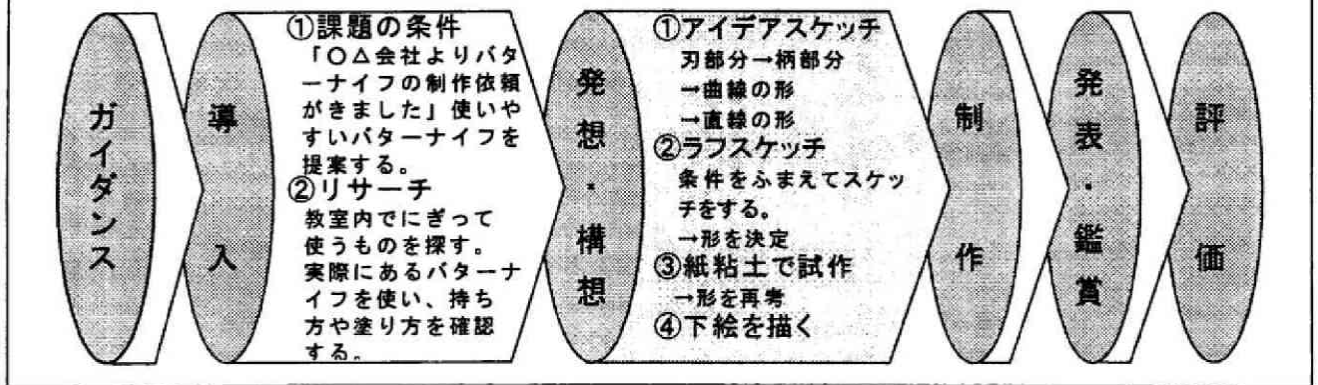
3 題材の評価規準

- (1) 身近にあるバターナイフに関心を持ち、主体的に表現や鑑賞の活動を行い、実用性と造形美を兼ね備えた物を創作し、生活を心豊かにするための工夫をする。(関心・意欲・態度)
- (2) 感性を働かせて生活や使うものの心情を基に用途と美しさを考え、豊かに発想し、バターナイフの実用性と造形美を生かして創造的に構想する。(芸術的な感受や表現の工夫)
- (3) 木材の特徴を理解した上で、制作手順や技法を知り、創意工夫しながら自己の考えに基づいて表現をする。(創造的な表現の技能)
- (4) バターナイフを改めて見直し、使いやすく、美しいと思う形を発見する。(鑑賞の能力)

4 学習活動と具体的評価規準(14時間)

学習活動	関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
○課題の条件を理解する。 ○にぎる機能をリサーチする。(導入・感受)(2時間)	・バターナイフの使用方法に関心を持ち、意欲的・主体的にバターナイフの特徴を理解する活動に取り組む。	・感性を働かせてバターナイフがもつ用と美を感じ取り、道具の必要性を理解する。 ・実用性と造形美を追求して自分が使いやすい形を感じ取り、発見する。		・バターナイフを改めて見直し、使いやすく、美しいと思う形を発見する。
○アイデアスケッチをする。 ○課題の条件ふまえてデザインを決定する。 ○紙粘土で試作。 ○下絵を描く。(発想・構想)(4時間)	・試行錯誤を繰り返したり、創意工夫を主体的に行ったりして、活動に取り組む。	・広い視野から豊かに発想した後、課題の条件を踏まえて形を生成して構想し、効果的な表現の工夫をする。	・スケッチを繰り返し行い、独自性のある表現を追求する。 ・制作意図に基づいた形を描く。	・他の生徒のアイデアを鑑賞し、表現の違いに気づき発想の幅を広げる。
○木の形状と特色を知る。 ○下絵を材料に写す。 ○糸鋸等でおおまかに切る。 ○研磨・彫刻・切断等、必要に応じて加工方法を選択する。 ○仕上げをする。(展開・制作)(6時間)	・制作することの楽しさや喜びを味わい、意欲的に作業を進める。 ・主体的に材料や用具を選択し、作業を工夫し、計画的に取り組む。	・木材の材質感を感じ取り、手づくりのよさを発見し、工夫しながら実用性と造形美を追究した表現をする。	・木材にあった工具や用具を自己の制作手順に沿って選択し、活用する。 ・用と美を追究し工夫しながら計画的に作業をする。 ・電動工具や用具を適切に安全に取り扱う。	
○完成した作品の使用感を確認する。 ○発表する。 ○相互に鑑賞し、よさや美しさを味わい、感想を述べる。(発表・鑑賞)(2時間)	・お互いの作品を真剣に鑑賞し、よさや美しさを理解しようと積極的に発言する。 ・自分の考えをまとめ意欲的な態度で伝える。	・自己の作品の伝え方を工夫する。 ・感性や想像力を働かせてお互いの作品を鑑賞し、理解する。	・他の生徒の作品の技術を鑑賞し、自己を振り返り、今後の制作に生かす。	・他の生徒の作品の制作意図や工夫に気づき、作品の美しさの調和を感じ取り味わう。

学習活動 —導入と発想・構想の具体例—



### 5 結果と考察

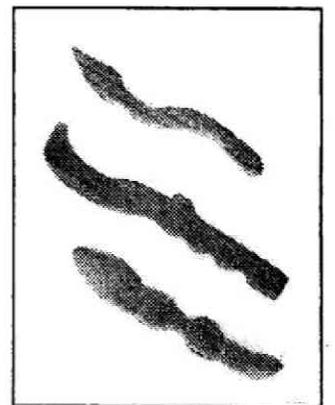
導入で意識付けをしてからじっくりと発想に取り組み、十分に構想を練った上で制作に入ることが一人一人の表現力を高めるために大切なことと考え、授業改善・工夫を行った。

導入での課題説明では、「企業から制作依頼が来た。完成したものは依頼者にプレゼンテーション（発表）する。」という仮定で制作することを話した。これはデザインというものが個人の主観だけでは成立せず、用途に合った汎用性や機能美、消費者の視点や他者に対する責任といった意識を育てるためである。しかし、その一方でデザインの表現では一定の制約の中で個性的な表現ができなくてはならない。そのために「にぎる機能のリサーチ」を行った。まず教室にあるものをにぎってみて、にぎりやすさや使いやすさを調べることから始めた。自分で実際に「にぎる」という行為を意識させてから、実際にパンとバターを用意して、バターナイフを使ってみた。すると生徒は、改めて、塗るという行為を再認識し、自己のバターナイフの持ち方や塗り方を発見していた。

発想・構想でのアイデアスケッチでは、まずバターナイフの先の形、次に持つところというように部分に分けてスケッチをした。次に、「曲線でできているバターナイフを考える」というようなテーマを与えて、時間を決めて数多くスケッチをするようにさせると、生徒は様々なアイデアを生み出すことができる。その後のラフスケッチでは、課題の条件をふまえてじっくり取り組み、充分アイデアを練り込んだ形を決定していくことができた。

木から切り出す前には、紙粘土で形をつくり、乾燥させた後、持ち方や塗り方の確認をした上で形を再考したことで、展開図（木に貼り付け切り出す形）へ記入することが容易にできた。

誰もが持ちやすく塗りやすいバターナイフを提案していくために、制作中は自分で使いやすいものを基準につくる。制作途中や発表時に他の人に使ってもらう場面を設定するなどしながら、客観的な判断を意識させていった。



### 6 まとめと考察

一人一人の表現力を高めるために発想・構想の段階を着実に組み合わせた後、制作へ入った。そして自分で絶えず確認して作りながら他者の意見も参考にして、完成度を高めることができた。その結果、一人一人の個性的な造形美のある作品が生まれた。

自分で作り、形ができていくという工程は、完成したときに達成感がある。一つの物を完成させた喜びを、一年を通して何度も体験することが、芸術を愛好する心情や、物を大切に作る気持ちを育てることになっていくであろう。

( 書 道 )

題 材 名 「導入期における用具と運筆の理解と書作時の紙面構成＝空間把握」  
(書道 I)

1 題材設定の理由

小・中学校における国語科書写の授業では毛筆の性能についての指導は基本的に行われていない。表現する力を伸ばすためには、まず第一に用具（筆）のもつ特性を十分に理解することが重要である。そして次にいざ紙に向かったとき、その与えられた紙面＝空間に文字・文言を、字の大きさ、線の太さ、字間・行間を考えて書かなければならない。これらを短時間で易しく指導することで、生徒一人一人の基礎力を築き、表現力の幅を広げる授業を展開する。

2 題材の目標

「毛筆の特性」について、その構造や長所や短所を理解し、直側筆や太細線、回転線、直線の運筆法ならびに筆の弾力を生かした運筆法を身に付ける。また導入期において、与えられた6文字の語句を半紙縦置き・横置きで配置してみることで、紙面の構成について学ぶ。

3 題材の評価規準

- (1) 毛筆の構造や機能を知り、遊び感覚で多様な線を引く（描く）ことで、用具に対する苦手意識をなくし、筆線に興味関心をもって、主体的に表現活動を行う。(興味・関心・態度)
- (2) 文字数や用紙サイズについての固定観念をなくし、紙面＝空間を把握して、豊かな感性を意図に応じて自由に表現工夫する。(芸術的な感受や表現の工夫)
- (3) 毛筆の特性を活かし、紙面＝空間を十分に考慮して配置を研究し、自らの感情を自らの意図するままに表現できる技能を身に付ける。(創造的な表現の技能)
- (4) 自分や他人の作品をよく鑑賞し、その作品から受ける多様な美と感情、その表現力や表現の方法を十分に味わい、次の表現活動に生かす。(鑑賞の能力)

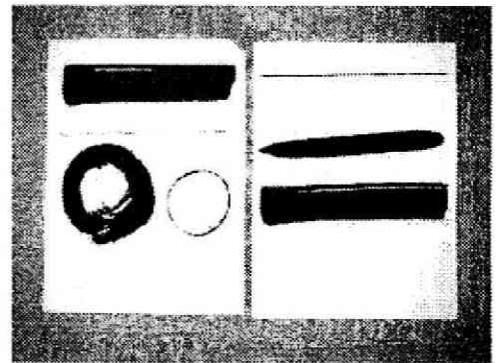
4 学習活動と具体的評価規準（4時間）

学習活動	関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
毛筆の構造と機能、特性を知る（2時間）				
太線と細線で直線と円（螺旋）を描く。	文字を用いず図形を思いきって描ける。	どちらが描きやすいか。自分なりの工夫ができる。	変化をつけて大きく描き違えることができる。	太細、曲直の区別ができる。異なる形状の線から違うイメージをうける。
力を入れずに細い直線を引く。	自然に直筆に運筆する。	無駄な力を抜いて運筆できる。	筆を十分に吊り上げて、定規を使用したような直線が引ける。	
直筆と側筆で線を引く。	直筆と側筆を理解する。	厚みのある直筆線が引ける。平面的な堅い側筆線が引ける。墨色に差が出る。	筆を垂直に構え引きたい方向と鋒の向きとを一致させられる。筆を倒すようにして紙の抵抗に負けずに運筆できる。	運筆法による線質の違い（墨色や余白のコントラスト）をイメージできる。
筆鋒に垂直に力をかけていく。	弾力を体感する。毛筆がねじれや横方向の力に弱い（弾力を生かせない）ことを知る。	弾力を生かす力の加減が理解でき、実践できる。	垂直に力をかけることができる。弾力の効いた線を引くことができる。	

与えられた6文字の語句を半紙に自由に書く。(2時間)				
板書された6文字を半紙に書く。半紙を横置きにして書く。	配置を考える。	配置や文字の大きさを考えて書く。	文字の大小、線の太さに強弱をつけ、半紙に体裁よく収めることができる。	参考作品や他の生徒の作品から、多様な表現方法や作品のイメージを感じとる。自分の作品には自分の意図が思いどおり表現できたかどうか考え、次の表現に生かす。
額縁状に余白をとり、中央に塊に書く。二つの塊に分けて書く。塊の外形を考えて書く。	半紙を縦置きや横置きにして自由に書くことができる。	塊の外形や配置を考え、文字の大きさや線の太さにも気を配って書くことができる。	書体も含め、語句や作品としてのイメージを持つことができる。そのイメージどおりに、大小、太細、強弱や、文字群と余白とによる疎密などに変化をつけて書くことができる。	

## 5 結果と考察

毛筆に対する生徒の苦手意識は、普段使い慣れている筆記用具（硬筆）に比べて毛筆は筆先が柔らかい（軟筆）こと、そのために自由が利かず自らの意思どおりに筆を操ることが困難であることによるところが大きい。本来毛筆は鋒先を使う極めて細い線から鋒の長さいっぱい（究極は鋒の長さの2倍+筆の太さ）の太い線まで1本の筆で引くことができる優れた道具なのであり、その構造を知り、特性



を生かして多種多様な線を引かせることで、毛筆の利便性を体感、理解させる。筆がねじれると筆はひらかず、割れ、弾力も失う。筆を倒して運筆したり鋒先にかけるべき力を筆の腹（横）にかけると筆の弾力、復元力は失われ曲がったままの状態になってしまう。これら二つの大きな弱点を理解させ、構造上の腰毛（弾力を生むための中に混ぜられた短い毛）なども理解して弾力が体感できると、書写で行ってきた側筆気味に筆を紙に押しつけた運筆ではなく、筆を十分に吊り上げた垂直に近い構えで直筆系の運筆ができるようになる。

6文字の漢字仮名交じりの書では、はじめ何も言わずに書かせると、95%以上の生徒が、書写で行ってきたとおりの半紙縦置き1行3文字の2行書きに書く。そこで半紙を横置きさせると、それだけでどのような配置にすればよいかを考え始める。それをきっかけに空間の埋め方、空け方など参考作品等を鑑賞しながら気付かせることが可能になる。

## 6 まとめ

生徒一人一人の表現する力を伸ばすためには、一人一人の表現の幅を広げ、多種多様な表現のための技術、技能を体得させなければならない。そのきっかけをいかに行うか、書塾における指導や小中学校を通してこれまでに慣れてきた一定の用筆以外に、毛筆という道具そのものを知ることから毛筆の機能や特性をよく理解させ、多様な用筆、表現のための多様な技術、技能を修得させることが重要である。生徒の中には「眼からうろこ」状態のものもいれば、最後まで殻の破れないものもいる。ただ、生徒たちのほとんどは非常に楽しみながら筆を扱うようになり、書による表現活動の喜びを感じ、その後の臨書、創作活動に主体的に取り組んでいる。

生涯にわたり毛筆に親しみをもち、ときには筆を執ってもらえればと願う次第である。